別紙第６号様式

国立大学法人香川大学学長候補適任者所信

平成２３年　５月　６日

国立大学法人香川大学学長選考会議議長　殿

学長候補適任者　氏名　加野芳正　（自署）

大学の使命は知の創造（研究）、伝達（教育）、応用（社会サービス）にあります。今後、大学の財政はますます厳しくなると予想されますが、自由闊達な大学文化を形成し、これらのミッションを着実に果たしていきます。また、これまで本学が保有してきた資産（学部、研究科、附属施設など）を継承し、学部・大学院等の自律性を尊重しつつも経営サイドとの密接な連携のもとで、これらを発展させていきます。財政の安定は大学経営の重要事項ではありますが、経営問題は財務の問題とイコールではありません。教育、研究、社会サービスという大学の使命を果たしていくため、本学がもちうるあらゆる資源を適切に組み合わせて、活力のある香川大学を創っていきます。

香川大学は大きな組織であり、学長一人のリーダーシップによって運営することは不可能です。そのため、理事（副学長）、学部長、教育研究評議員、教職員等との連携を密にし、英知が結集できるようなチームを編成して、運営していきます。場合によっては、教員の専門性を教育・研究のみならず、大学運営においても発揮してもらいたいと思います。また、香川大学をより活性化させるためには、教員はもとより、事務職員のモチベーションを高めていく必要があります。そのための評価システムの導入も大事ですが、もっと重要なのは「やりがい」や「働きがい」のある職場を創っていくことです。すべての教職員が意欲を持って働き、努力が報われるような香川大学にしていきたいと考えています。香川大学をより良くしたいという「思い」は、構成員に共通のものです。その「思い」を大学運営に反映させ、大学のさらなる充実に結びつけていきます。

本学の運営にあっては、長期的視点から香川大学のあるべき姿を描きながら運営していく側面と、中期・短期的な課題を成果に結びつけるという二つの側面があります。前者の中長期的な観点からは、以下の三点を重要視しています。一つは、教育改革のシンボルとして「学生中心」の大学づくりを加速させていくことです。「学生中心」とは、学生の立場に立った大学づくり、学生の主体的参画をうながす大学づくり、と言い換えることができます。現在でも「大学づくり委員会」があり、学生の意見を大学づくりに反映させようという試みがなされています。こうした試みを授業改善、ボランティア活動、学生による学生に対する支援活動等へと深化拡大させていき、学生の自主的な活動を支援していくことによって、学生の学ぶ意欲を高めていきます。二つは、大学運営の効率化を図っていくとともに、近隣大学との連携、ネットワーク化を進めていくことです。道州制の議論にかかわらず、四国は一つのまとまった地域を形成しており、他方で、財政の状況を考えれば大学規模の縮小も考えておかなければなりません。そうしたなかで、社会資本の整備が遅れた四国地方に責任を果たしていくためには、四国の他大学との連携が不可欠だと考えます。そのための大学間の橋渡し役を、四国の先頭に立って果たしていきたいと思っています。このことも関連しますが、第三に、地域を「香川」「四国」「中四国」「日本」「世界」と広げながら、その中での香川大学が果たすべき役割を見定めていくことが重要です。とりわけ稀少糖の研究に代表されるような、「日本」や「世界」に発信できる香川大学の個性ある研究をいかに育てていくか、本学が直面している大きな課題です。

中期・短期的な課題についても三点を指摘しておきます。一つは、第２期中期目標・計画を着実に推進していくことです。中期目標・計画はそれぞれの大学で異なっているので、その評価は順位を競うような性格のものではありませんが、計画を着実に実行し、高い評価を得ることは重要です。教育、研究、社会サービスに関する第２期中期目標・計画の評価は、第１期の例にならうと、平成 26 年度に行われます。評価では成果が厳しく問われることになるので、評価室を中心にしっかり対応していかなければなりません。評価は査定の側面もありますが、教育・研究の活性化に結びつけるためのピア・レビューとしての性格ももっています。評価結果に一喜一憂するのではなく、評価にいたるプロセスを大切にし、本学の活性化のために利用していきたいと考えます。二つは、

新学部の問題に関してです。十分な情報を持ち合わせていないのですが、新学部構想は曲がり角にあるような印象を受けています。当面は新学部設置に向けて全力を傾注しますが、平成24年4月、さらには、平成25年4月の設置が難しいようなら、計画そのものの見直しが必要です。新しい組織原理のもとで、不安定化している教育・研究組織の安定化を図っていかなければなりません。同時に、既存の学部における改革を並行して進めていくことが重要です。第三に、大学院の充実です。大学への進学がユニバーサル段階に突入した現在、また、グローバルな知の競争の激化が進み、社会の構造やニーズが変化する中で、国立大学は大学院における教育・研究で存在感を増しています。修士課程・博士課程の在り方について検討するとともに、人文・社会系の大学院博士課程設置を目指します。

私は高等教育の研究に多少なりとも従事してきました。また、高等教育に関するさまざまな評価活動にも携わってきました。そうした経験を生かしながら、日本の高等教育のあり方について積極的に発言するとともに、本学においては丁寧な大学運営を心がけていきたいと考えています。中期目標・計画を着実に実行に移していくためにも、香川大学の存在感を高めていくためにも、本学の更なる改革に全力を傾注します。

※　学長候補適任者としての抱負を含めて、2,000字程度を目安に記入してください。